

ホリがたけの床に体長のメートル以上あるワが横たわっていた。顔を近づけてよく見ると、脚から背中から革靴をいっしょに集めて造られていた。

「こんなは、これ全部、靴じゃない？」

「そう、揃えるのが大変だったのよ。みんなワ革でし。古いゴミから選んできたの。でも、色とか素材を選んでいくと、なかなか使えるのがなくて、材料集めにたいぶ時間がかかったわ」

ホントにブーツもあればスリッパもある。ローファー、編み上げ、よくもこれだけ。彼女、大作主義なのだ。ひとつの作品を造るのに数か月はさら、一年以上かかってしまうこともあるらしい。このワニ、彼女によつて元の姿ならに戻ったわけだ。とにかく面白い、ワが寝ている隣の椅子には、金属製のエビがいた。気がつく、その仲間のサカナやカエルも。こわくわくと手にとると見ると、これまた胴体が空型、ハサミはワイーク、脚はスプーン、頭は靴型といった金物ばかりで造られている。

「こういう材料つて、どこから集めるの？」

「まあ、全部ゴミといえはゴミだけど。スクラップ置場とかものによつて色々なところがあるよ。そのエビなんて材料を集めていたら面白くなってきて、サカナとか仲間を色々造って見たの」

「ゴは？ アレは？ とたずねていつても、全部材料はゴミ、といつては失礼だから産業廃棄物や家庭からの廃品。名作はジーンズの一部分の布はしを州ごとに

あてはめた巨大アメリカ合衆国地図。日本の主婦の趣味とは発想のスケールが違う。日本の若いアーティストでもゴミから作品を造る、といった作風はあるけれど、ちやうどハリーが造る。

話が変わるけれど、ロンドンの街や道路は、いつ見てもキレイなものだ。ゴミなんか落ちていない。でも、ゴミ収集の方法は、ナゾミ、可燃物、不燃物なんていうふうに分別収集しているわけではない。全部まとめてキレイにホイス。市民道徳は尊敬するくらい高いけれど、エゴジシの意識は感じられない。良いところなのか、どうなのか。

ともかく、アンはまた別のゴミを集めて次の大作にとりかかっていた。ほぼ実物大の馬の材料は、なんとヤシの実だ。丸い鼻、長い馬面、ふさふさのタテガミ、太く力強い首、全部ヤシの殻で造る。この立体造形の芯には針金と粘土が入られている。彼女はロイヤル・カレッジ・オブ・アートへの出身だ。ロイヤル・アルバート・ホテルの近くにあるこの芸術大学は権威がある。もちろん、それだけでなくアーティストやデザイナーの逸材を毎年送り出している名門校だ。そこで造形を専攻した彼女、基礎はしっかりしている。ヤシ殻の馬は今にも動きださそうにダイナミックで、生きている。

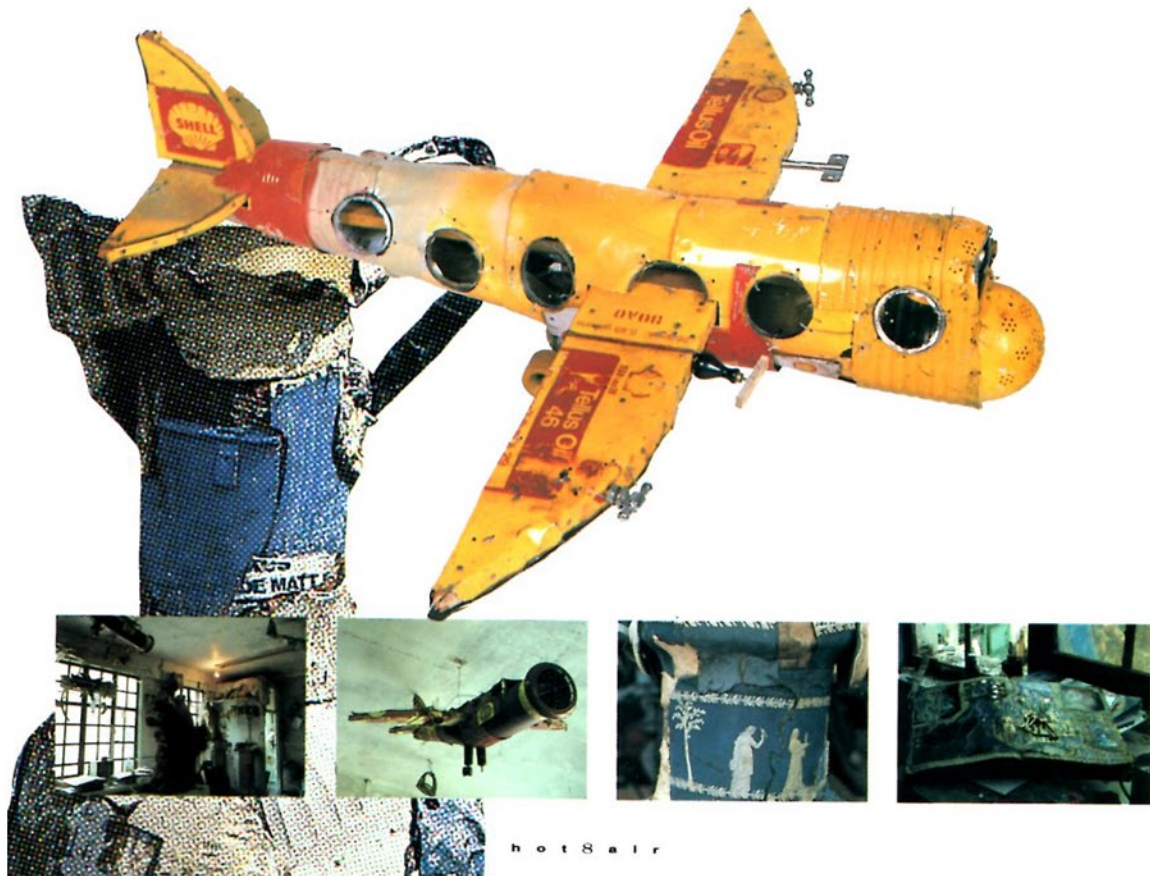
「材料のヤシ殻は友だちがヤシを扱う工場に勤めているから、そこから送ってもらってるの。一度にそんなに量が出ないから、これも少しずつ仕上げています。」

と彼女。大作家として立派なゴジのもち方なのだ。それにしては、このスタジオは汚い。彼女が使う前は、この建物はインテリア内装業者のオフィスだったという。そのため、裏庭が広い。ちやうどバービカン駅と地下鉄線路を見下ろせるその裏庭に出てみると、錆びて朽ちたクルマ、誰かの巨大な作品なんかがいっぱい並んでいる。ガラタのテーマパークのようだ。

アンがロンドンの若いアーティストの典型というわけじゃない。むしろ、ユークなほうなんだろう。でも、圧倒的にパワフルで面白い。また日本へどうぞ。

この前日本に来た時、何か面白い材料は

A Storm in the Tube





Ann Carrington

アン・キャリントン Ann Carringtonは1962年ウインチェスター生まれ、87年にロイヤル・カレッジ・オブ・アートを卒業、本格的な作家活動に入る。スウォッチ展最優秀賞受賞はか大活躍。ギャラリーには委託せず、個人営業のアーティストである。54 Charterhouse St. Corner Hayne & Linsey St. LONDON ☎ 071-796-4019にある彼女のスタジオを訪ねれば作品は手に入る。A0サイズのカラーコピーによる作品は95ポンド



ありましたか。」
と聞いたら、嬉しそうに、小さな分厚いスクラップブックを広げてくれた。浅草の千社札やら可愛らしいものがいっぱい貼ってあった。そうか、このスクラップブック全体がこれまた作品に仕上げられている。やっぱりこの人、面白い。

サイバー・バクの時代に獲った
蒸気じかけのコンピュータ

地下鉄サウスケンジントン駅で下りて地下道を延々と歩く。出口は自然史博物館。その隣には地質学博物館、通りの向かいにはビクトリア&アルバート博物館がある。そして、イドパークに向かつてゆるやかな坂の続く歩道と、左側の建物が科学博物館だ。ここに、スチームコンピュータが展示されている。
ビクトリア朝の科学者チャールズ・ベッジが設計図のみを残して未完となった最初のコンピュータが復元された、というニュースを聞いたのは91年の春だった。それがどんなものか、想像もつかなかっただけに、しばらくはそのことを忘れていた。アツと突然思い出したのは、ウリアム・ギブスン&ブルース・スターリングの共著によるSF『ダイアレス・エンジン』の翻訳が出版されたからだった。サイバー・バクのかたりの若き巨匠による合作は、あの前世紀のコンピュータを題材としていたのだ。

チャールズ・ベッジは1791年生まれ、この時代に早くも自動計算機のアイデアを考案していた。1820年代からその実現に取り組み、業績半ばにして1871年没。
この人は、『ロイソクの科学』で知られるマイケル・ファラデーと同じ年に生まれた。という事実を知ったのも、科学博物館でこの

偉大なふたりの科学者の生誕200年記念展を開かれていたからで、日本ではファラデーの名前は知っていても、ベッジはほとんど知られていないし、紹介されていない。知らなかつた人は安心してください。ファラデー展に比べると、ベッジ展は少々地味だった。ガラスケースの中に目指すスチームコンピュータが納まっていた。真鍮と鋼製とガンメタル製の巨大な機械。高さ2.1メートル、幅3.4メートル、奥行50センチメートル。ギアとシリンドラーが数十個積まれたシャフトが何列も並び、右側にはハンドルがいている。これで色々な関数計算をこなす、というのがベッジの構想だったようだ。その仕組みからディアレス・エンジン(階差機関)という呼ばれる、とふたりの白衣の紳士が実演しながら説明してくれるのだけれど、難しくよくわからない。まわりに集まっている高校生や大人の見学者たちもわからない。わかからないような顔をしていたから、これはこれでいいのだろ。

実はふたりの白衣の紳士、白髪のリック・グック氏と少し若いパリー・ホロウェイ氏は、このコンピュータを復元した技術者だった。ベッジが遺した精密なドローイングから、新たに設計図を起して、使う金属材料もビクトリア朝のものと同じにし、およそ4000個にも及ぶ重い部品を作り組み立てて1500年後に完成させた、という次第だ。